九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ヘーゲル『精神現象学』における「啓示宗教」について

佐々木，孝洋

https://doi.org/10.15017/1397651

出版情報：哲学論文集. 16, pp.109-112, 1980-09-20. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

発表要旨

ヘーゲル『精神現象学』における「啓示宗教」について

佐々木孝洋

(一)

ヘーゲルは『精神現象学』「啓示宗教」の章で次の如く語っている。「自己意識と実体としての自体とは、精神 Geist の二つの契機であって、それら両者が、それぞれの側において自らを外化し、自らを投げ出すこと gegenseitige Entäußerung によって互いに他となる時に精神はそれらの一性となって定在に歩み入る (PhB. S. 526)。」この叙述は、さしあたり「啓示宗教（キリスト教）」における「啓示 Offenbarung」という出来事の表象について、またいわゆる「三位一体」について語ったものと解されよう。すなわち、父なる神的実在が子なるイエスにおいて自らを外化し、受肉し、さらにイエスが個別者たる限りでの自らを再び神的実在の手に委ね、死に至り、かくて聖霊 Geist として復活する——という「啓示」ないし「三位一体」の表象が語られているかに見える。

しかし、ここで注意すべきは、この「自己」と「自体」との相互外化ということが、「啓示」ないし「三位一体」の表象について語られたものであると同時に、『精神現象学』における「精神」そのものの成立について、さらに「精神」そのものの「自己知」の成立について語られたものである、ということである。なぜなら、『精神現象学』におけるヘーゲルの思索は、「自己」と「自体」との否定的・相互外化的相関としての「精神」が、またかかるものとしての「精神」の自己知がしんじついかなる境位において成立しうるか——という一点に集約されてゆくものであったからである。『精神現象学』において、「精神」をしんじつ「精神」として語りうる地平を拓く自己意識の経験は、自己意識というものを、

何かそのつど変転する諸表象の束の如きものとは決定的に区別された、まさに自己意識として成り立たしめている実在、すなわち「自体」的なるものと、他方、あくまでこの「自体」を自らの知にもたらし、徹底的に「自己」化せんとする自己意識というものとの、知の場面における相関としてあるのである。

そして、いわゆるヘーゲルの「実体＝主体」論というのも、かかる意味での「精神」の構造として、また、自己意識の経験をそのものとして成立させている構造として理解されねばならない。主体たる限りでの実体とは、「精神」そのものに他ならないからである。ヘーゲルは言う。「実体が本質的に主体であるということ（すなわち、実体・自体が自己意識の、自己自身たることの確信のうちで、自己の実体として、いわばSubstanz seiner selbst として、つまり、自己意識が自ら自身であるそのことの基として知られること）は、絶対的なものを精神として言い表わす表象のうちに表現されている。――精神というのは最も崇高な概念であり、近代及び近代の宗教（キリスト教）に属する概念である（S. 24）。」

明らかにヘーゲルはここで、『精神現象学』における、「自己」と「自体」との相関としての「精神」、また自己意識によって自らの基として知られた実体たる「精神」、すなわち主体たる限りでの実体としての「精神」というものと、キリスト教における「啓示」についての、また「聖霊」ないし「三位一体」についての表象とを連関づけて思惟せんとしている。じじつ『精神現象学』においても、また後の『精神哲学』においても、「精神」が「精神」として成立するその最終的境位たる「絶対知」ないし「哲学」という章の直前に、ともに「啓示宗教」という境位が位置づけられているのである。『精神哲学』において、ヘーゲルは言う。「（啓示宗教たる）キリスト教の内容は、神を精神として認識させるということにある。この、キリスト教においては表象に対して与えられた gegeben ものであり、ただ自体的に実在であるところのものを、それ自身の本来的な境位において、すなわち概念において把握すること――このことが哲学の課題なのである（Enzy. §. 384）。」

ここには、ヘーゲルの哲学を単に「キリスト教的」なものに色どられた哲学と言っただけでは済まされない大きな問題がある。『精神現象学』を貫くヘーゲル自身の思索そのものの持つ一種の宗教性、また、そこで語られた自己意識の経験そのもののもつ一種の宗教性といったものを、根本から考え直す必要があるように思われる。

（二）

『精神現象学』において「啓示宗教」のもつ問題性は、この章に先立つ「道徳性」、とりわけ、「良心」のもつ問題性とその根底において直結している。この連関を正確に把握するか否かが、「啓示宗教」を考える際のほとんど決定的な点である。ここで「良心」について立ち入って述べる余裕はないが、少なくとも次のことは

確認されねばならない。

先に述べたように、自己意識の経験のもつ、「自己」と「自体」との相関という構造において、自己意識は、自らを自らたらしめている基としての自体的なものを自らの知へもたらし、それを「自己」化せんとするが、「良心」とは否定性そのものとして、この「自体」の「自己」化を徹底的に完遂するものなのであった。それは、「人倫」における実体的・自体的な掟や、自然的な使命といったものに「自己」を埋没させることを拒否し、自らの知にこそ、自らが自らたることの証しを求める対自存在の本来的形態を表現している。良心にとって、自らを自らたらしめる「自体」は、何か自らの「直接的な知」というものにおいて、自らの「自己」とそのままひとつになっている。表象の言葉で言えば、良心にとっての「自体」は、その「自己」において何か直接的な仕方で受肉しているのであり、ヘーゲルが良心を「生きた自体 (S. 461)」と呼ぶ時、そこには「生きた神」という言葉がその背後に見えている。

しかし、同時に注意されねばならないのは、良心が自ら自身であることの確実性 Gewißheit seiner selbst を、かかる仕方でその直接的な知において持つ、まさにその時、良心の「自己」は、自己自身を吟味する場を失い、そのつどの「わたくし」の思いといったものに閉塞してしまっている、ということである。ここにおいて、この「わたくし」の思いというものが、それによって吟味さるべき「自体」、また、いわばそれからの光のもとで良心が自らの「ある」ことを確証すべき「自体」は、完全におおわれてしまっている。

そうであれば、いかにしてかかる閉塞のうちにある良心は、再び自らを自らたらしめる「自体」を見出し、それへと自らを開き、自らを委ね、かくして、あくまで「自己」と「自体」との相関としての精神性を得ることが可能であるのか。いったい、いかなる仕方で自己閉塞的良心は再び、「ある」ということの、また「知る」ということの地平を拡きうるのか——。

「啓示宗教」における「相互外化」の思想、すなわち、冒頭に挙げた「自己意識と自体とがそれぞれの側において自らを外化し、自らを投げ出すことによって互いに他となる時に精神はそれらの一性となって定在に歩み入る」——という思想は、まさしくかかるコンテクストにおいてはじめて意味をもちうるのである。すなわち、「精神」の定在に関して語られたこの「相互外化」の思想は、決して単に何か（イエスにおける）出来事の表象について語っているにすぎないのではない。「道徳性」の章最後の一節で言われる如く、「精神が定在に歩み入るのは、ただ自己自身についての純粋な知が、自己自身との対立と交替であるような、そうした絶頂においてのみ (S. 471)」なのであり、そして、この「絶頂」こそ、自己閉塞的良心が自らの「ある」こと、また「知る」ことを可能にするものへと再び開かれ、いわば、むきなおる (convere)

「最後の転換点(S. 547)」を為しているのである。

ヘーゲルが「啓示宗教」におけるこの「最後の転換点」を「不幸な意識」として語ることの意味は決定的に大きいのである。「自己」と「自体」との「相互外化」という思想を、いわゆるヘーゲル流の単なるミュートスにおとしめるか否かは、この「最後の転換点」として特徴づけられた「不幸な意識」と、その「喪失の自覚」というものの把握にかかっている。ヘーゲルは、表象の言葉で次の如く語っている。「不幸な意識は(直接的)自己確信のうちへとあらゆる実在性が喪失され、それと全く同様自らの知が喪失されていることを自覚している。すなわち、実体の喪失同様、自己の喪失を自覚している。この不幸な意識は〈神が死んでいる〉という痛切な言葉によって表明される苦悩なのである(S. 523)。」「自己」と「自体」との知の場面での相関としての「精神」が良心の自己閉塞から、いわば復活を得て『精神現象学』の終極的境位たる「絶対知」という地平を拡きうるのは、かかる不幸な意識の「自覚」というものに支えられてでしかない。

たしかに、自己意識は自らの知の場面で、「自己」性を欠いた自体的な実体の「秘密をあばき(S. 492)」、それを「自己」化せんとする。そのことがなければ、「精神」は(「人倫」においての如く)精神的「実体」たるにとどまるであろう。だがしかし、自己意識を欠いた実体の秘密があばかれるということは、同時に実体性を欠き、「自体」性を欠いた自己意識の真相がそのものとしてあばかれるということでもあるのである。そして、『精神現象学』における「良心」の章の叙述は、まさにそのことの徹底的な遂行としてあったのであり、それは、かの「絶頂」としての、また「最後の転換(conversio)」としての不幸な意識の「喪失の自覚」というものをさし示していたのである。

およそ「精神」が「精神」として成立するということは、自己意識による「自体」の「自己」化ということと全く同様に、自己意識がその「知」の可能に関してあくまで「自体」に対して自らを開いている、というかかる仕方をおいて他にはありえないのであり、そして、そのことを「啓示宗教」は何か表象的な仕方で語っていたのである。

では、「精神」というもののかかるあり方を、さらに、最も純粋な意味での「知」というまさにそのこと自身に即して問う時、いかなることが事柄そのものとして語られねばならないのか。しかし、それは『精神現象学』における「絶対知」そのものへの問いのうちで問われねばならない。

〈付記〉小論は口頭発表の原稿をもとに新たに書きあらためたものである。なお、ここでは充分扱いえなかったことも多いため、「哲学論文集」第十五輯に掲載の「道徳性」についての論文をも参照していただきたい。

(長崎大学教養部講師・哲学)